

令和 3 年 5 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00961

研究課題名(和文) 近世前期武家書状による政治情報伝播に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Study on the Propagation of Political Information through Samurai Letters in the Early Modern Period

研究代表者

三宅 正浩 (Miyake, Masahiro)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：30612303

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：近世前期には、大名たちの間でやりとりされる書状により、様々な政治情報が伝達されていた。本研究は、こうした政治情報の伝播に用いられた書状を収集して分析したものである。書状という手段によってどのようにして、どのようなルートで情報が伝わったのかを解明した。

なお、当時の書状は、基本的に年代記載がないため、研究に用いるためには、年代比定が必要である。本研究では、年代比定に用いるための書状データの蓄積も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史研究における重要な一次史料であり、近世前期における政治情報伝達的手段であった書状には、年代が記されず、“やりとり”した当事者同士での了解事項を前提に記載されているという史料的な扱いにくさがある。本研究は、こうした書状の扱いにくさを克服するため、書状による“やりとり”の復元を試みたものである。近世前期政治史を考える上で最も有用な史料といえる武家書状について、その史料弱点を補い、書状史料から最大限の情報を引き出す一つの方法論を獲得した。

研究成果の概要(英文)：In the early modern period, a variety of political information was transmitted through letters exchanged among feudal lords. This study collects and analyzes the letters that were used to transmit such political information. The study clarified how and by what route the information was transmitted by means of letters.

Since the letters of the time are basically undated, it is necessary to date them in order to use them in research. In this study, we also accumulated data on letters to be used for dating.

研究分野：日本近世史

キーワード：書状 大名 武家社会 政治情報 幕藩関係

## 1. 研究開始当初の背景

かつて「徳川実紀」を代表とする二次史料によって描かれてきた近世前期政治史の分野において、1970年代半ば以降、一次史料の利用が進展し、近年では一次史料に基づく研究方法が常識となっている。一次史料に拠りながら考察することで従来通説とされてきた歴史的諸事象・概念の捉え直しが進み、新たな歴史叙述が可能となり求められる段階となっている。

近世前期の政治史における一次史料の中心は日記と書状であるが、両者には得られる情報の質に大きな差異がある。「江戸幕府日記」のような公的な日記は、歴史的事実の確定には有用であるが、その背後事情等を知るには適さない。逆に、史実の背景や関係者の動向などを具体的に示してくれる一次史料が書状であり、書状は未だ十分に活用されていないが故に近世前期政治史を大きく深化させる可能性を有していると考えている。

近世前期の政治情報伝播の主たる手段であった武家書状について、その史料的特質を捉えて有効活用する方法論を獲得し、さらにそこから当時の政治情報伝播の構造・特質を考察することは、近世政治史研究を大きく進展させる成果となると予想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近世前期（織豊期から17世紀半ば）における武家書状の史料的特性を解明し、そこから当時の政治情報収集・交換の具体的な様相を復元することである。さらに、この研究は、近世国家成立過程における武家の結集・統合原理に迫ることを最終的な研究射程として実施した。

歴史研究における重要な一次史料であり、政治情報伝達の手段であった書状には、年代が記されず、“やりとり”した当事者同士での了解事項を前提に記載されているという史料の弱点がある。そこで本研究は、書状の史料の弱点を克服するため、書状による“やりとり”の復元を試みた。近世前期政治史を考える上で最も有用な史料といえる武家書状について、その史料の弱点を補い、書状史料から最大限の情報を引き出す一つの方法論を確立することを目指した。

本研究は、従来から歴史研究に多用されてきた書状史料について、一通ごとの内容分析（解釈）に留まらず、複数の武家書状群を付き合わせるにより得られる多角的データを研究に用いる方法論の獲得を目指したものである。

## 3. 研究の方法

(1) 従来、特定人物の発給文書を悉皆的に収集し、書札礼や花押型の変遷などを解明して内容分析に役立てる研究方法が試みられ、多くの成果が得られている。対して本研究では、特定人物の書状の悉皆的収集・分析ではなく、書状による“やりとり”を復元する研究手法をとった点において、これまでの類似研究との顕著な相違点があり、独自性を持つ。

本研究の核となる、書状による“やりとり”を復元する方法論を探るには、全国各地に残る近世前期の武家書状を収集し、差出人・受取人ごとに分類する作業が有効と考えた。そこで、『大日本近世史料 細川家史料』（東大史料編纂所 以下、『細川家史料』）、蜂須賀家文書「草案」（国文学研究資料館所蔵）の二つの書状群を研究の基礎史料として用いることにした。さらに、松井家文書（『松井文庫所蔵古文書調査報告書』八代市立博物館）、山内家文書「長帳」（高知城歴史博物館所蔵）を補助的に活用することで、より多角的な分析を試みた。

(2) 本研究では、まず上記～の書状群について、年月日・差出・宛先などの基礎情報を入力したデータの作成を行った。これは、概ね編年順に整理されているの書状群も含めて、年月日や差出・宛名の人名ごとに相互に対照できるようにすることを企図したものである。

同時に、当該時期の政治情報を把握するための手がかりとして、江戸幕府の法令集のうち、編年索引が存在しない「憲教類典」、「教令類纂初集」を対象に、年月日を入力したデータを作成し、特定の年月の法令へのアクセスを容易に行うことができるようにした。

(3) (2)で作成したデータを用い、個別具体的な事例についてのいくつかの個別研究を進め、近世前期の書状による情報伝播に関する研究成果を発表した。また、データ作成過程で発見した政治的に重要な情報を含む武家書状について個別に分析を進めた。さらに、複数のデータを相互に対照する作業によって、当時の政治情報伝播における情報の結節点に位置すると予想される人物をピックアップする作業も実施した。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究により以下の武家書状のデータを入力・蓄積した。

「細川家史料」(細川忠利書状) 4287件

「蜂須賀家文書草案」(蜂須賀忠英ほか書状) 4445件

「松井文庫」(松井氏宛書状) 1219件

ただし、2020年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延により、データ入力を担う研究協力者の雇用が困難となったため、予定したよりも少ない件数となった。

(2) 幕府法令集の編年索引作成の作業を下記の史料について実施した。

「憲教類典」

「教令類纂初集」

この作業により、既に編年索引が存在する『御触書寛保集成』と合わせて用いることによって、近世前期の幕府法令を年月日順に把握することが容易となった。今後、上記(1)の成果と対照することにより、近世前期の政治情報の伝播を把握するツールとして利用できる。

(3) 本研究実施のための関連史料として、下記の機関で史料収集を実施した。

山口県文書館(山口県山口市)

「毛利家文庫」および「毛利家文書」写真帳の閲覧・撮影

島原図書館(長崎県島原市)

「幕府日記」「忠利日記」他の史料を閲覧・撮影

四国大学附属図書館(徳島県徳島市)

徳島藩蜂須賀家関係の史料を閲覧・撮影

ただし、2019年度末～2020年度に予定していた史料調査は、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって中止せざるをえなかった。

(4) 2019年度末以降の新型コロナウイルス感染症の蔓延により、研究協力者の雇用および全国各地への史料調査が実施できなくなったため、データ入力および史料調査の代替措置として、刊行された史料集のスキャナーによる取り込みおよびOCRを実施し、完全な方法ではないものの、PDF検索によって史料から必要な情報を獲得できる環境を整備した。

(5) 本研究全体の成果としては、近世前期の武家がやりとりしていた書状の数をいくつかのモデルケースを用いて把握でき、なおかつそうした書状による情報交換の人的繋がりをある程度把握できたことが第一の成果である。特に、政治情報の結節点に位置する特定の重要人物を何名か突き止めることができたことが大きな成果である。近世武家書状を研究に用いることの有用性を確認し、今後の研究に活用することのできるデータと史料を蓄積することができたことが最大の成果となる。

なお、本研究によって作成したデータベースから得られたデータを相互に参照して行った研究成果の主たる部分については、研究論文として投稿中のものや刊行予定の共著に収録予定のものがあり、今後順次発表していく予定である。また、研究実施の過程において発表した成果としては、主なものとして以下のものがある。2018年度には、「近世初期備中国の所領構成 小堀政一の知行地を考える」と題した論考を発表し(『倉敷の歴史』29号、2019年)また、「賀古豊前考」と題した研究報告を実施した(2018年度読史会大会、於：京都大学、2018年11月3日)。2019年度には、「近世前期の武家社会と都市京都」と題した論考を発表した(杉森哲也編『シリーズ三都 京都巻』東京大学出版会、2019年)。2020年度には、「徳島藩江戸供家老の日記」と題した小論を学術誌に掲載した(『日本歴史』872、2021年)。いずれも、本研究により蓄積したデータおよび史料を用いた成果、あるいは本研究の実施過程で得られた知見を用いた成果、あるいは本研究により得られた方法論を用いた成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三宅正浩	4. 巻 29
2. 論文標題 近世初期備中国の所領構成 小堀政一の知行地を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倉敷の歴史	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三宅正浩
2. 発表標題 賀古豊前考
3. 学会等名 2018年度読史会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 杉森哲也編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 358
3. 書名 シリーズ三都 京都巻	

1. 著者名 松平治郷（不昧公）研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松江市	5. 総ページ数 103
3. 書名 不昧の手紙 「大圓公手翰」を読む	

1. 著者名 松江市史編集委員会 編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松江市	5. 総ページ数 779
3. 書名 松江市史 通史編3 近世	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------